

こちらフリースクールです。 フリースクール卒業と成長を祝う会

あたたかい風が春の足音を運んでくるこの季節、フリースクールでは、「卒業と成長を祝う会」が開催されました。子どもたちの今までの成長を、子ども、スタッフ、保護者の方々が一緒になって祝おうという伝統行事です。中学校を卒業する子には、初代の卒業生から脈々と続いている番号と、卒業までの学びの証を記した卒業証書が手渡されます。卒業生以外の子には、その子の成長の歩みを記した、歩み証が手渡されました。歩み証の中には、「こんなことができたね。」「居場所を一緒に作ってくれてありがとう。」「仲間がきっと支えてくれるよ。」「自信をもって歩んでね。」「こんな想いが込められています。証書を受け取る姿は、堂々と頼もしく、改めて

その成長を実感しました。会の終盤、子どもたち一人一人からの言葉が述べられます。「今年は仲間が増えて嬉しかった。」「カードゲームの世界大会を目指します。」「フリースクールに来て、本当の自分を出せました。」「自分も受験頑張ります。」「今年度を振り返っての思い、これからの希望や夢、仲間への感謝の言葉、その1つ1つに心震えました。会にはたくさんの保護者の皆様、ビーンズの他事業のスタッフも駆けつけてくださいました。保護者の方からの愛情こもった差し入れに囲まれて、立食パーティーがスタート。会場はわいわいとにぎやかな雰囲気になりました。これだけ多くの人と、子どもたちの成長を見守れたというこ



とを感じ、幸せな時間でした。パーティーも終盤の頃、1年の活動の様子を写真で振り返るムービーが上映されました。1ヶ月かけて、楽しかった写真を自分たちで選び、思い思いに編集した力作です。「あんなこともあったね」「あそこにも行ったね」と笑顔で1年を振り返っていました。子どもたちは、安心できる環境の中で、今日も笑顔で日々を重ね、それぞれのペースで成長しています。この安心できる居場所を共に支えて頂き、本当にありがとうございました。

ビーンズ通信 Vol.74

●発行日/2016年3月25日

●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒980-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL <http://www.k5.dion.ne.jp/~beans-f/>
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。



全国から530名を超える仲間たちが集った福島大会

第11回 全国若者・ひきこもり 協同実践交流会 in 福島
～支援と協力の架け橋～
～若者が未来を語る明日へ～

私たちの活動

- 3月31日(木)～4月6日(水) フリースクールビーンズふくしま春休み
- 4月20日(水) オールママday みんなの家@ふくしま 全てのママ、パパ、プレママなどでも参加出来ます。みんなで子育てを最新科学で解明する番組を観た後、いろいろなお話をしませんか?
- 4月27日(水) 新小学1年生ママday みんなの家@ふくしま 今春小学1年生になったお子さんをお持ちのママ達を対象に、新1年生ならではの悩みや不安を語り合いませんか?
- 6月19日(日) NPO法人ビーンズふくしま 定期総会開催 詳細は後日お知らせいたします。

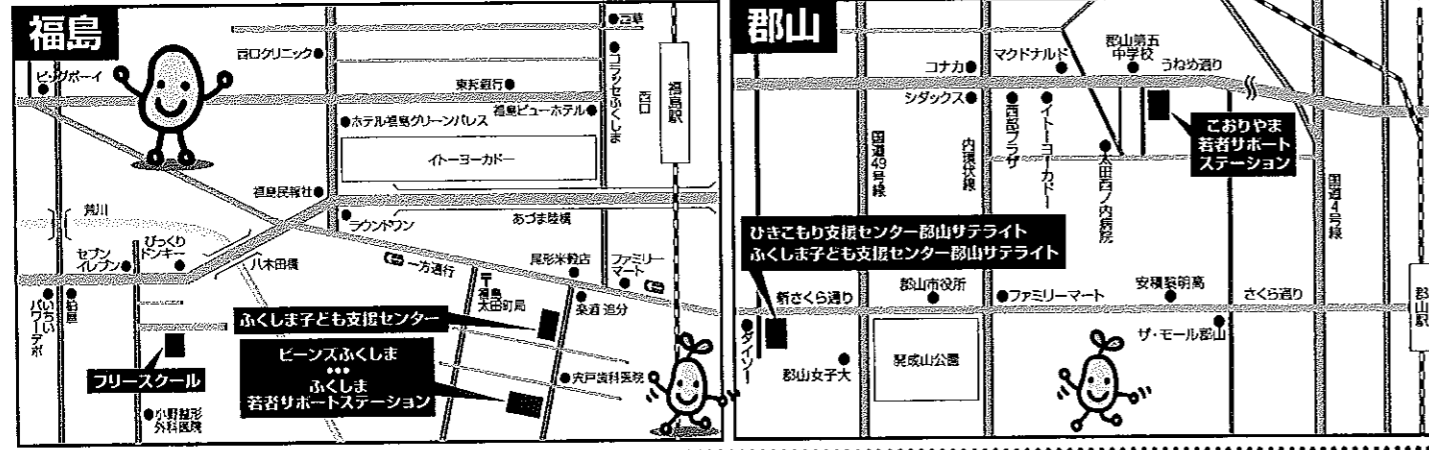
みんなの家@ふくしま祝1周年

福島市笹谷にオープンした「みんなの家@ふくしま」が3月19日(土)で1周年を迎えました。利用者さんを中心に笹谷団地町会の方や、普段参加出来ないパパの姿もあり、133名の方々に賑わいました。笹谷小学校合奏部の演奏や、ママ達が企画したマルシェやバザーの開催、午後からパパ向けのセミナーも行い、みんなの家らしい和やかであたたかい1周年でした。



編集後記

イベント盛りだくさんの2月・3月でした。にぎやかにあわただしく日々が過ぎていき、気がつけば、もうすぐ4月。この時期は気温も上がってきて、空の色もきれいになって、個人的にはお正月よりも「新たなスタート」を強く意識させられます。来年度はどんな1年になるのでしょうか。——いや、まずは自分がどんな1年にしたいのかを考えてみようと思います。みなさんは、どんな1年にしたいですか?



●ビーンズふくしまのホームページ はこちらへアクセス → <http://www.k5.dion.ne.jp/~beans-f/>

1年前からビーンズふくしまが微力ながら現地事務局として準備を進めてきた「第11回全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 福島」、心配された雪もなく、2月27日・28日福島市の桜の聖母短期大学にて無事開催されました。

今回の福島大会には、文字通り北海道から沖縄までの全国36都道府県から多くの皆さんの参加をいただき、県外からの参加者が290名を超え、県内参加者を合わせて530名を超える「仲間たち」が集っていただきました。

全国からご協力いただいた皆様、ありがとうございました。



実行委員として共に福島大会を創っていただいた皆様、お忙しい中一緒にこの一年を共に歩んでくださり、ありがとうございました。

当日様々な形でご参加いただきました皆様、福島大会の暖かな雰囲気を共に創っていただき、ありがとうございました。

そして、福島大会ウエルカムの雰囲気づくりに力を尽くしてもらった若者の皆さん、「若者と共に」を創っていただきありがとうございました。

これからの福島の取り組みを共に

そうしたたくさんの皆さんに支えていただき、開催できた福島大会だったことにあらためて感謝しますと共に、このつながりを、これからのつないでいくこと、それが私たちに求められていることであり、担っていかなくてはならないことであると感じています。

今回の学びをこの福島の地でどう生かしていけるのか、この福島の中からこれから何を発信していけるのか…福島の皆様と共に、創っていくスタートにしていきたいと思います。

今回、若者が語り合うという新しい形で行ったシンポジウムや、7時間半をかけて様々なテーマで語り合った分科会、まさに皆さんで膝を突き合わせた2日間でした。じっくりと語り合うこと、それが震災後の5年間でなかなかできなかったことかもしれないと思いました。やらなくてはならないことに追われてきた福島…ここでじっくり膝を交えて語り合う、からスタートするのも良いのではないのでしょうか。

この2日間の報告を参加者から聞きながら、続きの議論をしていく、そんな取り組みも面白いのでは、そうしたアイデアを出しながら、これからの取り組みにつなげていきたいと思っておりますので、これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

●支援者の「衣」を脱いで、やりたいことをやってみよう!

大会シンポジウムでは支援者でも当事者でもある「若者」として、若者支援や地域社会の未来についてお話ししました。支援者という立場は、いつしか自分本来の姿(同時に若者本来の姿)を隠してしまい、あるはずの無い「良い(正解の)支援」を探してしまいがちです。しかし、支援者だろうと被支援者だろうと、与えられただけの未来に希望を見出すのは難しいものです。だからこそ立場に引っぱられず、同じ人間として「一緒に未来をつくる」気持ちが、若者支援のあり方として大切だと思います。

ただ、そういった「協同」の要素を話し合っただけでは実感が沸かないので、大会中に「協同とはこれだ!」と思うことも実践しました。

例えば、座布団に座り皆でま〜るくなって話す、心も立場も開放された座談会形式のシンポジウム。また、「支援者も当事者もそうでない人も全員ごちゃまぜ」で大会を盛り上げたフリンジチーム(※詳細は江藤のパートで)。「良い支援をしなきゃ」、「良い大人にならなきゃ」そんな気持ちで押しつぶされそうになったら、何でもいからやりたいことを皆で切磋琢磨してやってみる!それが協同の第一歩目になるはず。



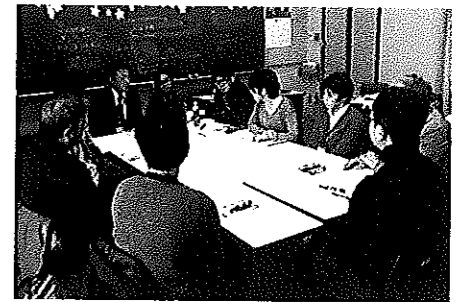
こおりやま若者サポートステーション 小林直輝

●素晴らしいつながりをいただいた分科会

私が担当した分科会では、「生活支援のあり方を探る」というテーマで今年度から施行された生活困窮者自立支援制度を中心としながら、貧困

という状況に置かれている方々に対する支援のあり方について事例報告も含めながら参加者の方々と議論を深めました。

事例報告を通して、普段お会いすることのない実践者の方々からお話を伺うこと自体大変貴重な時間だと感じましたが、それ以上に分科会の参加者の皆さんも含めた多くの方々と直接、活動やそれに対する思い、困っていること、今後の展望等について情報交換できたことがとても良い刺激となりました。自分たちと近い志を持った方々がいると肌で感じら



れるだけで、これからの活動の励みになりました。

今回の実践交流会でいただいたこの繋がりを今回だけで留めることなく、情報交換等を重ね、今後の活動に生かせるよう大事にしていきたいと考えています。

福島県ひきこもり支援センター 遠藤宏志

●「ひきこもる家庭への支援」をテーマに

アウトリーチ支援を実施している方々のお話をもとに、分科会に参加して下さった多くの方と、アウトリーチ支援の必要性、有効性、課題等について深め合えた2日間でした。

「ひきこもり」という、本人に会えない支援を継続していく中では、家族が対象者であると認識した上で、繰り返し面談を行い、家庭環境、背景を知ること、何が出来るかではなく、いかに気持ちを込めて対象者と向き合うか、それらがいつしか本人に届くと信じる気持ちを持ち続けることの大切さを再認識しました。

アウトリーチとは、届かないところに手を差し伸べることで、本人と家族の喜びや苦しみが一番近くにいることが出来るのが私たち支援者であること等、今回の分科会では、支援の真意を学び合うことが出来たとても有意義な機会となりました。

福島県ひきこもり支援センター 山下仁子



全国若者・ひきこもり 協同実践交流会 in 福島

それぞれの 協同...

福島大会では、

テーマ別交流会・特別分科会・ワークショップと
実に13の分科会が同時に開催されました。
そして、若者が様々なところで活躍をしました。

そんな様子を
スタッフから伝えてもらいます。



つくし



ぎん

●特別分科会③「家族交流会」

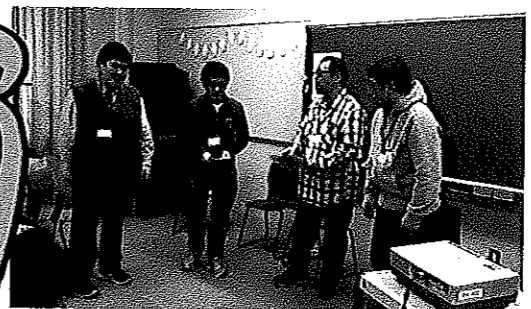
KHJひきこもり家族連合会の協力を得て、「家族会の現在」についてプログラムを組み、「家族会の今」「当事者の会の今」「ひきこもり大学」全3回で行いました。「家族会」については、実際に家族会を立ち上げ運営している静岡・新潟・山形の代表者の方々に話していただきました。課題や運営だけでなく、なぜ「家族会」だったのか、ご自分のこれまでを振り返りお話ししていただきました。

現在も、家族のひきこもりに向かう代表の方もおられ、

ご自身の体験からの言葉が、心にしみ「家族会」の大切さを改めて実感することができました。「当事者の会」は、当事者同士がサポートに関わることに、様々な視点から話し合えたことが大変有意義でした。また、ひきこもりのことは、その当事者から学ぼうとの思いから、「ひきこもり大学」として当事者を講師としてひきこもりについて学びました。

ひきこもりは、家族の熱意や愛情があれば何とかかなると言うことでもありません。ひきこもりが、現代社会の課題であれば、「学ぶ」という行動が必要だと思いました。

福島県ひきこもり支援センター 千葉桂子



●生きる希望を失わずに、「本当にやりたいこと」を形にしていけるか?

フリンジチームはそんな問いから始まりました。とある女の子が命名してくれた大会キャラクター「ぎん&つくし」。そこに込められた「想い」が広がり、たくさんのママや子どもたちが製作に協力してくれました。

そして福島の事を全国に知らせようと始まった会場装飾。ガーランドやモチーフ作りには若者や高校生が。大会を盛り上げたいとの「想い」を込めたマルシェや懇親会の運営は福島や東京の若者と。出演バンドメンバーやワークショップにご参加いた

だいた皆さん、ここには書ききれないくらいの方と共に創り上げたフリンジチーム。

これぞまさしく協同!多くの壁をワクワクしながら乗り越えてくれた仲間達。やりたいことを形にし、その想いが、人の心を動かしていく。みんなが主役で心が躍動した2日間になりました。



ユースプレイス(東北) 江藤大裕

●震災と若者支援

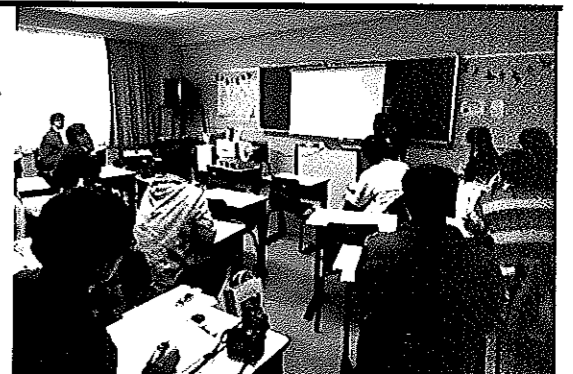
この分科会では、被災3県の震災後を俯瞰し、その中で、若者支援や関連領域で、これまで動いてきた支援者が何を感じてきたのかを、まず全国の参加者に知ってもらうため、1日目は3県から各1本の報告を行い、2日目には、震災後の影響が子ども若者の困難に結びつくのを防ぐ取り組みについて報告を行った。

また、午後には、震災を機にボランティアやNPOなどの活動に飛び込み、活躍の機会を得て自信をつけた元当事者3人からの報告・ディスカッ

ションを行った。

どの内容にも共通するのは、東日本大震災という災害が、命や、生き方、日々の暮らしや社会との関わりを、望む・望まないに関わらず、問い直すきっかけとなったこと。そして、その中から今できることで動こうとしていた若者がいたこと。若者の力を活かす場が、地域の場に存在したということだった。

従来の価値観では立ち行かなくなったときに、そこから解放された若者が活躍をする。今の社会や教育制度、家族の在り様などに対してのア



ンチテーゼでもある。今は、地域を支える立場で動いている若者の姿がとても頼もしく、復興の中での若者との協同の物語はこれからも紡がれていくと感じる分科会であった。

被災子ども支援部門 中鉢博之